

マスター ↑↓to アーティスト



【第14回】

< 絵の向こう側 >

中澤英明 美術学科洋画コース
教授

(なかがわ ひであき)

1955年 新潟県生まれ
1981年 東京芸術大学大学院美術研究科修了
1996年 子どもの情景展(三重県立美術館)
2004年 子供の顔展(愛知県美術館)
2006年 内なるこども(豊田市美術館)
2010年 ひろがるアート(三重県美術館)



こちらをじっと見つめる子ども。真正面から、曰く言い難い視線を見るものに投げかけてくる。愛らしい顔立ちの子どもばかりなのだが、どの子どもどこか透徹したような、たじろいでしまうような瞳でこちらを見つめる。奇異に感じてしまう人もいることだろう。しかし、目を離すことができない。何故か？ ごく一部、自分のお子さんを描いた作品以外、モデルは居ないという。その視線の源にあるもののヒントを教えてください。

「学生の時に、三木成夫先生(解剖

学者、発生学者であり思想家・自然哲学者としても知られる)の生物の講義を受けて、それが無茶苦茶面白くて…。胎児のデッサンがしたくて夏休みに1ヶ月間、毎日、先生のところへ押しかけて行ったことがあるんですよ」ヘッケルの反復説、「個体発生は系統発生を繰り返す」(ある動物の発生の過程は、その動物の進化の過程を繰り返す形で行われる)を、実際の胎児の映像で確認する講義があった。「可哀想なんだけどメスで切り落とした首を、正面から見せてくれるんです。発育の時期によって対になる動物、サメだとか

ナマケモノだとか、と同じ顔なんですよ」生命に畏怖を抱くとともに、その不思議さに魅せられた。

もう一つの原体験。「僕が育った頃は、社会が、ハンディを持った子どもをあまり隔離しなかった時代で、そうした子が同級生でも何人かいました」脳性小児麻痺だった無口な子、発達障害で足が萎え歩けない近所のおにいちゃん、いつも眼帯をつけ薄暗い部屋に籠もっている女の子、肝臓疾患で顔が浅黒くむくれてしまっている子、頭部に火傷を負った子。常人とは異なる、細く柔らかな髪、薄い虹彩の色、火傷の跡、肌の色、い



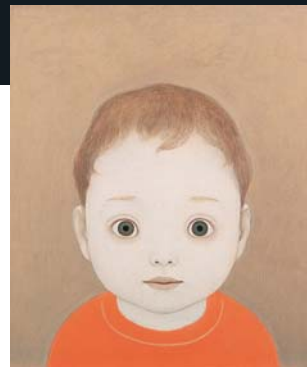
中澤 英明 2001
「子供の顔 - ベコちゃん」
30×30cm
テンペラ・油彩・石膏地・寒冷紗・板



中澤 英明 2004
「子供の顔 - アーモンド」
45.4×38cm
テンペラ・油彩・白亜地・綿布・板



中澤 英明 2004
「子供の顔 - 風人 (ふうと)」
45.4×38cm
テンペラ・油彩・白亜地・綿布・板



中澤 英明 2004
「子供の顔 - オレンジのTシャツ」
45.4×38cm
テンペラ・油彩・白亜地・和紙・板
Photo by 福岡 栄



びつな肢体……、彼らの情景が、鮮やかな色彩とともに記憶に刻まれている。そして、こう付け加える。「当たり前前のごとがとても大事。このことを教えてくれた。日常の尊さ、みたいなことですね。彼らの一番の望みは、普通であることだと思ふんです」 初期の作品では、水頭症の子どもやみつくちの子どもが描かれた。そっくりそのままモデルとはなっていないが、記憶に残る彼らの一部がモチーフとなっているという。

ヤン・ファン・エイクの「ターバンの男の肖像」の複写を取り出した。



フレームにフラマン語で書かれている言葉がある。「英語で言えば“As I can.” 直訳すると“私ができるように”なんです、美術修復家の黒江光彦氏は“己の能う限り”と訳されました。自分が注げる、技術、愛情、時間……、持てる限りのすべてを注いでこの絵を描いたと、胸を張って

いる言葉なんです」 そうやって描かれた絵には、描かれているもの以上に伝わるものがあるという。「絵にとって大切な事は図柄ではなく、背後にあるものなんです。方便なんですよ、描くものは。見る人は、絵の向こう側にあるものが見たいんです」 絵は、描かれているものだけでなく、描いている人の思いや精神までもが伝わるもの。

作家が抱える、人間への関心、慈愛、温情、憐憫、痛み、悲しみ、生命への畏怖、尊厳……。絵の子どもたちに惹き付けられる理由が、少し見えた気がした。